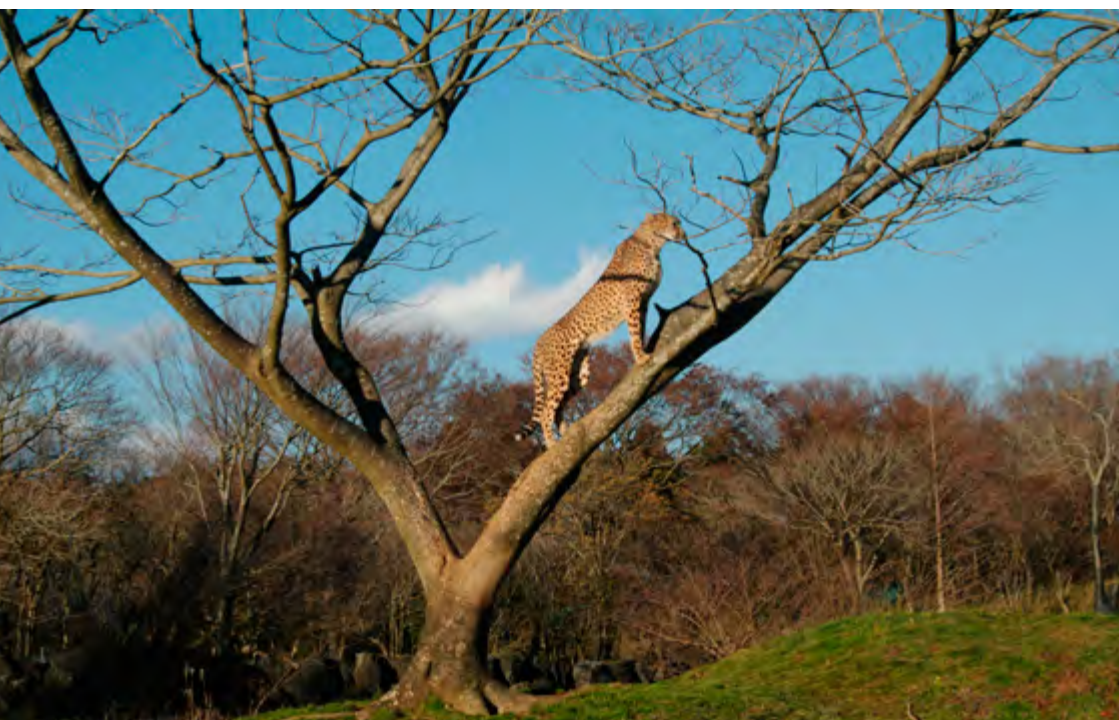


あを 1

2019



石狩の風波奏づる枯柏
小さな木菟掌にピカソ莞爾たり
夕焚火けむりの象に父泛ぶ



あそ

一月



初しぐれ

東京

佐藤 喜孝

初しぐれカミオカンデン通り抜け
雲のなき空とむきあふ風の海
金木犀町のこちらも袋路
一字空けの俳句の穴へ忘れ花
蟲しぐれ引金をひく前とあと
秋日和ふつか前なる魔法瓶
老い猫へひと夜廊下の秋灯
冬瓜やこのごろ妻を見かけない



東京

森 なほ子

小春日

木枯やネオンふるへる雑居ビル
立冬や鉄音高く鉄工所
白々と並ぶ湯呑や秋の暮
木の影の生れては消えて返り花
小春日や横丁の御隠居今何処

東京

赤座 典子

紺碧海岸

ニースなる天使の湾に冬茜
花柊ギャルソン運ぶ大きな盆
着ぶくれて昔々の石の街
西洋の浅きバスタブ冬灯
名にし負ふ紺碧海岸冬日照る

埼玉

秋川 泉

芋煮会

渦巻きて深みにをどる紅葉かな
秋の湖父と子添ひて影ひとつ
渋柿や強き甘味にひと月後
誘はれて酒一升と芋煮会
秋夕べとぼとぼとゆく大型犬

東京

石森 理和

もみぢ

ぱくりぱく胡桃饅頭柚子のお茶
もみぢせるただ見ほれたる山法師
空広し見渡す田畑踏む枯葉
平野枯る撓な柿はオペラ歌手
文化祭動きだしさう馬車に乗る



埼玉

大日向幸江

酉の市

酉の市バッグに入れる火消し札
義士の日の空の青さに月白く
廃屋の柿の実一つポケットに
冬帽やいつも通りの散歩道
短日の子に促すや入浴を

東京

七郎衛門吉保

地中海

秋澄みてシャガール澄めり青と赤
トリフ料理探す坂道サンポール
フェレンツェの名画三昧文化の日
手足欠くポンペイの像天高し
マルセイユ船から船に秋の虹

東京

篠田 純子

鴨 鵜 雀

鵜のしばらく浮いて来ぬ冬の池
鴨の陣桜田濠に日比谷濠
白と黄の厚物据ゑて松坂屋
枯れ葦にしばし雀の居り無風
塩害の雌木にほひをり実の小さし

石川

定梶じょう

山眠る

捨て案山子すゝめがあたらしびにけり
山売りしことな咎めそ霧の鵒
時刻ややバスが遅れて冬に入る
小春日や遮断機上がることを忘じ
半鐘は今も高きに山眠る



東京 須賀 敏子

行く秋

ご自由に冬瓜一つ持ち帰る
六枚の私の部屋の畳替
百年の家百年の木守柿
銀杏降る尾を垂れて行く犬もゐて
行く秋や図書館からの電話あり

東京 田中 藤穂

敷松葉

敷松葉寺に武田の滅亡史
歳時記に夫の書込み冬の夜
冬瓜や緑青色の岩絵具
山茶花を椿かと問ふ牛乳屋
竹簾上ぐる手元みんなで覗きこむ

三重 長崎 桂子

冬木立

秋深し老人会のメロディベル
木漏れ日は弱くて紅葉かつ散りぬ
冬に入る養老山脈黒み帯び
冬木立山の裾野の清しさよ
みどり濃くぼっとしてゐる冬木立

千葉 早崎 泰江

冬の風

石楠花の花の苔に冬の風



東京 佐藤 恭子

母の顔

日の中に手折りてみたき姫椿
平手から拳にかへて去年今年
初御空薄々のこる月ひとつ
元朝やいつものとき願ひごと
母の顔薄れつづける大旦



十一月号作品より

秋川泉・森なほ子・佐藤喜孝

あげは蝶顔にかむさり去りにけり 佐藤 喜孝

作者の顔を被うように飛来して、揚羽蝶が去った。
その情景を想像するだけでドキドキしてしまいま
す。揚羽蝶が近くまで飛来しても、顔に「かむさる」

と云う事はなかなかない様に思われ、その揚羽蝶が
何かの化身のようにも感じられて……。まことに
神秘的な体験を作者はなさったのではないでしょ
うか。(泉)

まどろむや懐かしい顔秋の声 長崎 桂子

うとうとしていると、夢を見ました。昔の友が亡
き人か、懐かしい顔という言葉が胸に響きます。季
語「秋の声」がその人の声と重なり、一層しみじみ
と思ひ出に浸ります。(なほ子)

上とか。作者は、どんな葡萄を召し上がったのでし
ょう。何方から贈られた葡萄なのでしょう。その
葡萄にはどんな思い出があるのでしょうか。それは作
者にしか分からない秘されたものなのでしょうね。
ますますその真相が知りたくなります。(泉)

秋夕焼むかしは富士の見えし坂 田中 藤穂

高台にお住いの作者です。富士見台、富士見坂な
どの名はあちこちに残っていますが、今は名ばかり
の所が多いでしょう。秋の夕焼けの美しい日はこと
に、「あのあたりに富士山が見えた頃」のことがあ
れこれ思い出されます。(なほ子)

秋灯や電気飴の次電気椅子 森 なほ子

灯下、作者は俳句の推敲をしてゐるのかも知れな
い。『広辞苑』で「電気飴」を引いたら次が「電気椅子」
であった。夜店で歩きながらの電気飴、楽しいはず
の隣が電気飴だったので驚かれての句である。辞書
の中も禍福は糾へる縄の如しである。『日本国語大
辞典』では「天気雨・電気飴・電気行火・電気按摩・
電気椅子」とありました。(喜孝)

食べ了へて思ひ出となる葡萄かな 森 なほ子

野分とて物買ひ込みて籠城す 赤座 典子

とてもミステリアスな句。

世界に千種以上の葡萄があり、日本では百品種以

今年は七月以降、台風の発生が多く毎週のように
嫌になる程やって来た。作者はその台風に備えて買

物をして籠られた。それを「籠城す」と詠まれたところ、台風は大変であつても、ちよつとしたゆとり感もある句と思ひました。(泉)

稲妻の先導するかロードバイク 秋川 泉

現代的な若々しい句が颯爽と登場です。にこやかに敬語を駆使される奥様は魔女、ではなく、実はバイク乗りなのです……しかも稲妻の中を(稲妻のように?)革ジャンブーツヘルメットのツーリング姿をぜひ拝見したいです。(なほ子)

栗御飯のほのかな甘味病む人へ 秋川 泉

病む人へのやさしい心やりが「ほのかな甘味」に感じられる。たしかに砂糖の甘味と違ひ野菜などは噛みしめるとやさしい甘味が口中に広がる。わたしも人參などかりかり噛んで愉しんである。(喜孝)

ごしき鶉好きな絵ハガキ机辺に 石森 理和

高木で樹皮は黄色の染料として、また生薬として用いられるそうです。真つ青な秋天と真つ黄色の稲田、まさに二色刷と化した大地を鮮やかに詠み切りました。(なほ子)

軟膏のふた見失ふ昼の月 篠田 純子

日常生活のあるあるのひとつコマが「昼の月」で見事に詩に昇華しました。あのふた、油断しているところまで転がっていきまです。探し回って無事発見することもあれば、そのまま行方不明ということも……昼の月がまるで無くしたふたのように空に浮かんでいます。(なほ子)

ながれ星その時猫の耳うごく 定梶 じょう

なぜか宮沢賢治の童話の世界に迷い込んだような錯覚にとらわれました。とても魅力的な句。じつと目を閉じて想像の世界に心を遊ばせると、とても美しく素敵な夢を見た思いがいたしました。(泉)

ゴシキヒワは鳥綱スズメ目アトリ科。ヨーロッパから小アジア、北アフリカにかけて分布し、北方のものは南に渡つて越冬する。日本では時折迷鳥として記録されている。愛玩鳥として海外から輸入されているため、かご抜けした鳥も多い。鳴き声も良く赤、黄、白、黒などで鮮やかに彩られた美しい小鳥。作者はこの小鳥がとても好きなのですね。納得しました。(泉)

煮豆買ふ昭和の暮らし残る秋 大日向幸江

前の二句に続き、またも懐古の句をえらんでしまいました。煮豆買ふが昭和の日々を一気に呼び起こし、巧みです。ただ、「残る」が「昭和の暮らし」にかかるのか、「残る秋」なのか、ちよつとわかりませんでした。(なほ子)

秋天と地の黄葉色二色刷 七郎衛門吉保

この難しい字はきはだいろと読み、きはだは落葉

秋澄めり天変地異の国なれど 須賀 敏子

日本だけではないかもしれませんが、それでも日本は天災の多い国と思います。その日本は四季のある国。「秋澄めり」の季語のとうり、秋の空気の澄んだ中にあるとつくづく気持ち良く、日本に四季のあることの幸せを感じます。(泉)



リュウグウはけふも快晴鬼ふすべ 佐藤喜孝

秋高し高校生の吹奏楽 長崎桂子

昼月や豆大福に豆透けて 森なほ子

我が町と思へぬ人出秋の雲 赤座典子

秋霖の音聞くだけの日曜日 秋川 泉

柿畑どの木も撓わ人氣無し 石森理和

神の留守猫を従へ散歩せる 大日向幸江

秋天の上昇気流鳶三羽 七郎衛門吉保

向日葵の大いなる枯れ唐突に 篠田純子

燈を消せば長大息す笹の檸檬 定梶じょう

エプロンを作る一日小鳥来る 須賀敏子

あかあかと二間を灯し秋彼岸 田中藤穂

喜孝抄





佐藤 喜孝

定槌じょう

カップ 麺袋 麺 冬 来たりなば
障子 貼るかへ閉めてみるあけてみる
霜の田やようべ流星群がふり

一句目。カップ 麺や袋 麺で食事を済ますのは、若人と違ひわたしの年代になるとわびしさがつきまとう。『冬来たりなば』尚更である。『カップ 麺袋 麺』の俗語と『冬来たりなば』の古風な言ひまはしのアンバランスがおもしろく、そしてわびしさを倍加する。

二句目。自分で貼るかへた障子は殊更見事である。真っ白な紙に当たる日差しは紙をそれ以上に白く見せる。障子と障子の框が合はさった時、木の音のほか、太鼓のやうに張った紙も共に鳴って聴きあきない。『花のあと』

一句目。地元の祭。『天高し』と誇らしげなのは読む方も気持ちよい。規模がどうだろうとなんだろうと地元の祭は大切なことである。

二句目。小鳥を『待つ』のは南天とそして作者。町に小鳥の食べ物の少なくなる冬に向かひ、青木の実もピラカンサの実も赤くなる。四季の移り変はりの愉しさ。

三句目。地方には過疎化と高齢化により誰も住まぬ家が点在するといふ。薦紅葉の紅さがいたいたい。切れ字がことのほか響く。

森 なほ子

影 消えて逢魔が刻や芒原
辛くない鹿肉カレー 小六月
三才 ははや 裾汚し 七五三

一句目。『影消えて』は夕方ゆゑのことではなく、人影のことであらう。芒原に立つと異界に紛れ込んだ気分になる。音も聞こえてこない。静かな刻が流れる句である。今月は特殊なこの言葉が二句あった。

で北川景子がそつと障子に手を添へて閉めるときこの音を何回も聴けた。掲句は子供のやうに喜んでゐる作者がゐる。読むわたしは『閉めてみるあけてみる』を繰り返して読んで愉しませていただいた。

三句目。わたしの初夢は二日ではなかったが見事な流れ星の乱舞をみた。現実の厳しい寒さのなかでの流星群は一段と見事なことであらう。あまり目にせぬ『ようべ』。ようべは宵^{よいべ}辺の変化したものと、昨夜^{よるべ}の変化したものとある。過去と今である。文意を読み取りどちらかに決めなければいけない。やさしい響きがこころよい。

妻はニュースで知ると寒さに負けず屋上に出て流星群を見てゐたが、わたしは一度も付き合はなかった。夢がない男である。

須賀 敏子

入間には入間の祭り天高し
実南天真つ赤になつて小鳥待つ
秩父路や主なき住居 薦紅葉

影もたぬ逢魔が辻のははきぐさ 中原 道夫

白桃は逢魔ヶ刻を羽撃きぬ 八田 木枯

二句目。珍しい鹿肉のカレーを食べる機会があった。何回か食べていれば何でもないが、初めて食するときは一寸構へてしまふかも知れぬ。辛いカレーより辛いカレーは小六月に合ふ。

三句目。せっかくの晴着も三歳児にとっては親の苦勞は知らぬ。あつと云ふまもなく裾を汚してしまった。あらあらと言ひつつ活動的な子に育ったうれしさを覚える親や祖父母である。上五は一考。

田中 藤穂

胎内仏たれかに似をり冬の寺
十一月ホテル早くも聖樹立つ
綿虫や花魁塚は昼下がりに

一句目。掲句の胎内仏は胎内には居られないやうだ。たれかに似てゐるなあとは思ふが名指しするほどはつきりしない。仏様のあるところはお寺さんなので季語の働

きは小さい。

二句目。ホテルの聖樹ともなれば営業用、さぞや趣向を凝らした聖樹であらう。が作者はそのやうなことから、おやまあもう聖樹が立つてゐると驚かれた。「早くも」とあるので時候以外の季語を考へられるとよい。

三句目。いま映画『澤東綺譚』を見たところ。永井荷風の死んだ様子までも描かれてゐる。墓は三ノ輪の淨閑寺に、高さ五尺以内、「荷風散人墓」とせよとか。『澤東綺譚』に花魁は出て来ないが、掲句と重なってしまった。「綿虫」といひ「昼下り」を通して作者の女性としての念ひが感じられる。

赤座 典子

言張りて袴着のまま千歳飴
お転婆の被布から覗く御姫様
七五三子供みくじの皆大吉

三句共に七五三を祝ふ親の心持ちがやさしく表現されてゐる。被布から覗く女の子も千歳飴を下げた男の子も元気が有り余つてゐるやうでなにより。「子供みくじ」

「塞がつてゐるんですけど」とつぶやく作者を思つたりした。諧味のある句。

七郎衛門吉保

朝寒やトイレ代なりホットチョコ
「セザンヌ家」と路上に標識落葉道
ガウデイの曲線に似る銀杏の葉

一句目。ひとのトイレを借りた時お礼の代はりにホットチョコを差し上げたといふ句意か。外国詠らしいが、世界の狭いわたしに状況が今ひとつ分からなかつた。

二句目。立札でなく路面に標識が置かれてゐるやうだ。「路上」とあるので「落葉道」の道はない方がよい。雰囲気のある句。

三句目。銀杏の葉からあのガウデイの建物の曲線を想像する。作者独特な感性である。ここは季語があつた方がよい。「銀杏の葉」では季語にはならない。

石森 理和

と云ふものがあるらしい。皆大吉とは全ての親御さんの願ひ。全ての者が叶ふとは残念ながら限らぬから願ふのである。

大日向幸江

飯店の若衆無口飾売る
東風咲残る菊束ねたり
両手今塞がつてをり大根干し

一句目。わたしの町の新年の飾り売りは町内の鳶職がする。この句もそのやうだ。慣れぬ仕事に愛想なく立つてゐる若い衆が的確に描かれてゐる。

二句目。片付け好きの人であらう。まだ咲いてゐる残菊を括つてゐる。「東風」は通常「コチ」と読むがここは五音、「ヒガシカゼ」と読むことになる。せつかくの句にこの言葉はもつたいない。一案として引きのぼして「咲き残る菊そのままに束ねたり」。

三句目。大根を干すので両手が塞がつてゐるとき、誰かに何かを頼まれた。と勝手に状況を考へて楽しんだ。

峰に雪塩田平はいとほしき
枯れ涸るも弾み出しをり塩田平
日向ぼこ溶け入り散歩塩田平

一句目、二句目。「いとほしき」と言ひ、心弾むと言ひ、塩田平に虜になつてゐる。「枯れ涸るも」は表現に一工夫されてゐる。

三句目。三句ともども塩田平に溶け入り陶然とされてゐる作者である。散歩までしなくとも、「日向ぼこ塩田平に溶け入りぬ」。

秋川 泉

御会式や間より響く鉦太鼓
御会式や団扇太鼓の子も練りて
鈴虫や逢魔がときに集きをり

一句、二句目。御会式とは、「日蓮宗で十月十二日・十三日の祖師日蓮の忌日に行う法会。十二日の逮夜には、信者は万灯をかざして太鼓をたたき、題目を唱えて参拝する。御命講（おめいこう）。御影供（おめいく）。《季

『秋』と知る。わたしは本当にもの知らずだと今月の鑑賞文を書きながらつくづく思った。御会式も辞書の手を借りた。『闇より響く』で空気感のよく分かる句と想った。団扇太鼓と云へば昭和も半ば頃であつたらう。夜夜中団扇太鼓を打ち鳴らして家の前を通り過ぎていく一団があつた。姿は見たことがない。結構遅い時間ではなかったらうか。「ドンツクドンツクドンツクツク」といふリズムを今も覚えてゐる。

三句目。逢魔が時は夕方の謂だが、「夕方」とはまたイメージが違ひ少々おどろおどろしくなる。作者のイメージを尊重するが鈴虫がすだく夕暮れには少し重すぎると思った。しかしさう表現せねばならぬ心境に作者はあつたのであらう。

長崎 桂子

えがらつばいガラス窓越し十三夜
茸いろいろ炒め煮る焼く夕餉かな
気温差に五日臥所や落葉道

一句目。赤といつても紅葉の赤と弁天堂に塗られた赤とは違ふ。赤の競演で華やいだ光景。ただ「華やげり」と作者が答を出さなくともよいのでは。

二句目。最盛期の蓮の葉にキラキラ輝く露は見事である。葉の中央に鎮座します露を見てゐるとぶつぶつ泡が出てゐる。角度により金にも銀にも見える美しい露の玉である。掲句の敗荷の葉の露の玉は見たことがないの想像できない。雨か露かと作者も疑問を呈してゐるのも敗荷ゆゑであらう。

三句目。この句を読むと前句の敗荷も全く枯葉色ではないことが分かる。「枯れはじめ」は前句にも使ひたい。命の衰へてゆく蓮の葉にもまだ盛夏の頃の「青き香」を認められてゐる。

「荷」は、「はす（蓮）」の葉（實を蓮といひ、根を藕といふ。）と『字源』にあつた。荷・蓮の字は使ふが、蓮根にあたる藕は見聞きしたことが今まで無かつた。この植物を統べていふのはなんといふのかは出てゐなかつた。

一句目。「えがらつばい」を「藪辛ぽい」とまづ読んだ。斬新な表現であるが桂子さんらしくない。もしかしたら「絵柄つばい」ではと気がついた。どちらにしても漢字表現にした方がわかり易い。素通しではないガラス越しの十三夜に興味を示した作者。

二句目。食卓に茸料理が並ぶ。茸も一種類ではない。おいしさうな句が漂ってくるやうだ。このやうな肩の力を抜いた句も大切。

三句目。寒暖の差の余りの厳しさに体調を崩されたのか。復調して落葉道を歩かれてゐる。踏む感覚、句、健康になつたうれしさである。

変化の少ない日常から句を得るのは何方も苦労すること。作者は回りに目配りをしてコツコツとお作りになられてゐる。範としてゐる。

篠田 純子

さくら紅葉に透け弁天堂華やげり
敗荷に雨か露かと分かぬ玉
枯れ初めの蓮にあをき香のありて

毎月25日発売
定価1200円(税込)

月刊俳句界

2019年3月号

特集「読み」の重さ・深さ

○論考 青木亮人 ○名句鑑賞文例
○一句鑑賞
黒田杏子 宇多喜代子 岸本尚毅
山崎十生 上田日差し
○エッセイ 伊藤政美 夏石番矢 ほか

特別作品50句 筑紫磐井

クワビマ 俳句界NOW 江中真弓

長寿結社の秘訣

○論考 川名大 角谷昌子
○わが結社の10句
「ホトトギス」層雲「半夜」「南柯」
「淡柿」「海紅」「獅子吼」「京鹿子」

第20回山本健吉評論賞全文掲載

※セレクトシヨ結社「玄海」大石靖子

私の一冊 岩淵喜代子「ににん」

俳人訪問 塩川雄三「築港」

対談 佐高信の甘口でコンニチハ！
西崎文子（東京大学教授）

別冊 投稿俳句界 一流選者27名！
日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性あります。

株式会社 文学の森

お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com



「かはほり」

定梶じょう

〈梟の羽ばたき湯治場の百夜〉

この句をどう思う、という手紙を頂いたのは井上石動さんでした。夏井いつきさんが選者のTV番組「プレバト才能ランキング」で嘆賞なさった句、という。「百日の間、毎夜、梟の羽ばたきが聞こえました」。

石動さんが首を傾げる通り、梟やみづくは飛翔に羽音をたてないのが特徴。羽打つ音が聞こえるような気がしました、との意なら無論、違った表現が必要でしょうから結局、いつきさん、知らないで誉めてしまった。

句会の一参加者としてとり違えてとっちゃった、

ということ間々ありましたが、いつきさんの立場は全く違うのです。

そしてこういう句もあるのです。

〈羽音なほ夜空に残し蚊喰鳥〉 稲畑 汀子

最近こそ激減しましたが、以前は夕暮にかかると蝙蝠の飛翔はあたりまえの情景でした。「蝙蝠が海上にでた」とする句が私に何句かあって、句会では、蝙蝠と海のとり合わせに違和感がある、とそのつど批判的に評されたものですが、晩夏、残暑の候には特に波打ち際の藻などのほとぼりに蚊や蚋が集まる所為で明るうちは燕が、やがて蝙蝠が寄ってきます。なる程、海べに住まわぬ方々には分らぬ句なのでした。

さて「羽音なほ夜空に残し」です。永年蝙蝠を観察してきましたが、残念なことに羽音を聴いたことがない。鳶やかもめは「ぎしぎし」と、骨が鳴っているようなきしむ音をたてますが、蝙蝠はしなやか過ぎる如く羽打つけれど音を立てない。当然かもし

れません、蚊や蚋だって羽ばたきが聞こえたら怖い筈ですから。

そして汀子さん句を非難するわけにはいけません。拙句、へかはほりの羽音なるべし海に出づが句帳に残っているのです。のちに「幅幅の羽ばたき強く」と直しましたが、その頃は羽音の有無を知らなかった。いいかげんなものです。

音波を遣うそうですから、日が落ちたあとも蚊や蚋がいるかぎり蝙蝠は働くのですね。

紙粘土の小さき猪お正月

早崎 泰江

今年は亥年。紙粘土の句は一回り前の亥年に発表されたかわいらしい句。

わが干支の猪のかたちに残る雪

竹内 弘子

姉と同じ干支なのでよく覚えてゐる。わたしの干支の動物は親しみが持てないが、弘子さんは違ふや

うだ。

雑巾がけの猪突猛進秋の寺

篠田 純子

猪の句ではないがこの元気で今年を突き進みたと思つてゐる。

猪の眼を青と思ひし深眠り

金子 兜太

兜太は猪を「シシ」と読ませてゐる。「猪が来て空気を食べる春の峠」「猪の眼を青と思ひし深眠り」「夜の山猪の真上の崖氷柱」。生きた猪のシシはあまり好きではない。

ぬのししの鍋のせ炎おさへつけ

阿波野青畝

炬端の雰囲気。句が漂ふ。

猪もともに吹かるる野分かな

松尾 芭蕉

芭蕉に猪の句はこの句と「猪の床にも入るやきりふす」。どちらもキノシシ。古俳句には食べる句やシシと読む句は少ない。

天の瑠璃ふかく猪割かれをり

阿部 寒林

佐藤喜孝

あとがき

あけましておめでとう

正月でゆったりし、インフルエンザの猛威におびえ疲れぬやうゆったり作業をしてゐた。結果また「あを」発行が遅れてしまった。孫四人全てインフルエンザにかかり両親ももれなくかかってしまった。乾燥は未だまだつづいてゐます。皆様もお気を付けて下さい。

カットその他

七郎衛「吉保さんの万太郎シリーズに代はり扉―は関合正昭画伯の俳句と絵です。画伯は『獐』の編集をしていた時にカットで大変お世話になりました。ここではカットの大きさに拘らず掲載します。

神奈川県立美術館で「慈しみのまなざし 関合正昭展」が催されてゐます。

扉Ⅱ及びカットは創刊以来東亜未さんにお世話になりました。御礼申し上げます。今号より須賀忠男様にお願ひした所快くお引き受け頂きました。よろしくお願ひ致します。

(喜孝)



二〇一九年一月号

発行日 一月二十日

発行所 東京都中野区中央2-50-3

電話 090-9828-4244

ファックス 03-3371-4623

印刷・製本・レイアウト 竹僊房

カット／須賀忠男・福井美佐子・ティリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円 (送料共)／一年

ゆうちょ銀行 (普) (店番 018) 4586402

佐藤 喜孝 (サトウ ヨシタカ)